

はじめに

「応用哲学」。座りがいいのか悪いのか、よくわからない、少々危なっかしい響きのする言葉。その言葉を旗印に掲げた学会が二〇〇八年秋、産声を上げた。その名も「応用哲学会」。まあ、そのまんまの名前ではある。その学会の設立に関わった人たちや、学会が催したシンポジウムに登壇した論者が中心となつて、「応用哲学とは何か」、「応用哲学は、現代社会で、どのような役割を果たしうるのか」、「応用哲学会に何を期待するのか」といった問題をめぐり、各自、言いたいことを言い、書きたいことを書いた。そうして出来上がったのが、いま皆さんが手にしている、この書物なのだ。

本書のいわば姉妹編に『応用哲学を学ぶ人のために』（二〇一一年、世界思想社）なる書籍がある。この「お姉さん」が、「応用哲学」と銘打った授業の教科書ないし参考書となるべく編まれたのに対し、こちらの「妹」の方は、執筆者各自の想いや好みをもろに前面に出す「マニフェスト集」として企画された。できるだけ幅広いテーマを扱い、それなりに客観的な記述を試みた、いわばお澄まししたお姉さん。それとは対照的に、「本音トーク」全開である点が、やんちゃな妹たる本書の身上。当然、出揃った議論はてんでバラバラ。巻末の座談会でも話題になったが、その間には、微妙なニュアンスの違いどころか路線の対立すら読み取れる。

僕は、それでいいと思う。いや、それ「が」いいとすら考える。不協和音こそ、ポリフォニー

こそ、この分野にはふさわしい。応用哲学とは、まだ何も描かれていない真新しい画布^{キャンバス}。誰も訪れたことのない未踏の砂浜。そのキャンバスや白砂の上にとんな絵を描くのかは、まさに当人次第。そして、この「当人」には、いま、本書を手にとっておられる貴方も、もちろん入る。ここで述べられている好き勝手な意見に感心したり、あきれたりしながら、「応用哲学」という画布の上に、貴方なりの、いや貴方にしか描けない絵柄を、思う存分、描いてもらいたい。その結果、この領域には、いつまでたっても「その道の権威」や「第一人者」なんてのが現れず、代わりに、みんなが、遠慮も気兼ねもなく、対等の立場で賑やかに議論をつづける。応用哲学が、そういった風通しのいい広場^{アゴラ}になってほしい。そう願っているからだ。

* * *

本書の内容について、一部は駆け足で、一部はゆっくりと、メリハリをつけつつ順を追って紹介をしておこう。第Ⅰ部「宣言する！」に登場するエッセイは、「応用哲学とは何か」を正面切つて問うものばかりである。編者三人（戸田山和久、美濃正、出口康夫）の論考しかり、伊勢田哲治氏、河野哲也氏のエッセイしかり。第Ⅰ部は、メタ哲学的な視点から、「応用哲学論」を展開している諸編からなるのである。

一方、第Ⅱ部「提案する！」では、脳科学（茂木健一郎氏）や土木工学（藤井聡氏）といった、これまで哲学の「外」にあると目されてきた領域から、応用哲学という新分野に寄せられた「檄文」、さらには日本における応用哲学運動をとりまく話題を扱ったエッセイ（服部裕幸氏、横山輝雄氏）が収められている。応用哲学（念）の船出を見守る様々な視線が、ここでは交差しているのだ。続く第Ⅲ部「実践する！」は、現に自分の持ち場で応用哲学に携わっている立場からの活動報

告（眞嶋俊造氏）や、応用哲学の具体的な内実にかかわる議論（森岡正博氏、中山康雄氏、斉藤了文氏、柴田正良氏、信原幸弘氏、水谷雅彦氏）からなる。読者の皆さんは、この第Ⅲ部をひもとくことで、応用哲学という「看板の化身」を確かめることができるのだ。

応用哲学会は、これまで何度も公開シンポジウムを開催してきた。その中には、二〇〇八年九月、名古屋大学で開かれた設立総会でのシンポジウム「応用哲学とは何か」（発表者は、出口の他、小林博司、戸田山和久の各氏）、翌二〇〇九年四月、京都大学での第一回年次研究大会におけるシンポジウム「これが応用哲学だ！」（発表者は、伊勢田哲治、森岡正博、茂木健一郎の各氏）が含まれる。これらのシンポジウムにおける発表は（小林発表を除いて）、それぞれ多少なりとも手を加えられた上、以上の第Ⅰ部から第Ⅲ部までのあちこちに収録されている（ちなみに小林さんには、座談会に登壇頂き、応用哲学〔会〕に対する鋭いツッコミ役を演じてもらっている）。

さらに第Ⅳ部「横断する！」の執筆者は、二〇一〇年四月、北海道大学で開かれた第二回年次研究大会での公開シンポジウム「テツガクとブンガクと……」に出演した人たちである。哲学と文学は、かねてより因縁の仲。哲学者と文学者の間には、共犯関係が噂されたり（ソクラテスとエウリピデス、デカルトとモリエールなど）、一方が他方に絶縁状を叩き付けたりと、スッタモンダが繰り広げられてきた。数学科から転向してきた異色の文学研究者（若島正氏）。小説家との二足のわらじをはく哲学者（三浦俊彦氏）。分析美学の研究者（清塚邦彦氏）。哲学科出身の新進作家（谷崎由依氏）。これらの一風変わった顔ぶれが一堂に会することで、どのような化学反応が起こったのか。哲学はテツガクへと、文学はブンガクへと、少しはその表情を変えたのか。乞う、ご期待である。

第Ⅴ部「交流する！」には、台湾の陳思廷氏と鄭凱元氏、韓国の李尚郁氏という東アジアの

若手哲学者からのメッセージが収められている。応用哲学会は、その設立当初から、日本ないし日本語という枠に捉われない活動をモットーに掲げていた。ただ、海外志向といっても、北米やヨーロッパばかりでなく、東アジアや環太平洋圏といった、他ならぬ僕ら自身が住んでいる「この地域」にも眼を向けよう。そう意気込んでいた。そういつた志が、あたかも「結晶作用」を起こしたかのように、急速に現実化してきたのが、この一兩年である。ここに寄稿してくれたのは、それぞれ台湾と韓国で交流の窓口役を買って出ている人たちだ。

個人的な話で恐縮だが、台湾、韓国いずれの側にも、僕がかつてロンドンの留学先で机を並べた同窓生が含まれている。旧友たちと、このような形で再会できたのは嬉しいことだ。でもそれと共に、今の僕は、何か不思議な巡り合わせも感じている。国内における応用哲学運動の予想外の広がりも含め、僕らの身の回りで、いろいろな意味で機が熟している、ないしは時代が大きく動きつつある。そういった得体の知れない感覚に襲われるのだ。

いずれにせよ、彼らには、二〇一二年四月、千葉大学で開かれる第四回年次研究大会での公開シンポジウム「オウテツ、東アジアへ」に参加してもらおう予定だ。応用哲学の今後の東アジア的展開を、僕としても固唾をのんで見守っていききたい。

最後に第Ⅵ部、「ポスト3・11の応用哲学」と題された座談会である。いやあ、この座談会、大変でした。参加者は、三時間半にわたって延々話し続けても、まだまだ話題のつきない論客揃い。応用哲学と、その先輩格に当たる臨床哲学の関係。哲学の「ウチ」と「ソト」。東アジアにおける日本の哲学の立ち位置。ポスト3・11の哲学の可能性。そういった話題について、侃々諤々の議論が繰り広げられた。その結果、今回の収録に当たって、（少々アブナイ発言も含め）かなりの部分

をカットせざるを得なかったことは、僕としても残念だ。ともかく、当日議論に加わって頂いた方々（発言順に、鷺田清一、野家啓一、中岡成文、小林傳司、比屋根均の各氏）、お世話をして頂いた本書の制作スタッフ、また、座談会のために素敵な空間を提供して下さった Cafe Ineluktulan Kyoto の佐藤八寿子さんに、ここで改めてお礼申し上げます。

* * *

応用哲学会は、やっと三歳半になったばかりのまだ幼い学会だけど、その間、学会でも、社会でもいろいろあった。学会について言えば、まずは会員の数が増え、幅が広がったこと。特に、いわゆる分析系・科哲系ではない哲学者や、哲学以外の研究者、さらには職業的研究者の枠に収まらない知的アクティビストたちの相次ぐ加入はとても心強い。また上で触れた、学会の東アジア的展開の胎動も大きな収穫だ。

社会での大きな動きと言えば、むしろ「3・11」だ。東日本大震災と原発事故について、応用哲学会は、むしろ慎重とも言える態度をとった。緊急シンポ、緊急声明といった学会としての動きを、あえて起こさなかったのだ。だが、日本における応用哲学のムーブメントが、その本格的な始動の直後に、この大震災と原発事故に遭遇したこの意味は大きく、深い。そう僕は見ている。「なぜこんな形で人命が失われねばならなかったのか」「どうすれば、このようなことを二度と起こさないようにできるのか」。大災害や敗戦の後で、われわれが繰り返し問うてきた問題に、今回、さらに「なぜ、われわれはこれほど深刻な原発事故を起こしてしまったのか」という難題が加わった。これらは、この社会で生きる応用哲学者にとって、今後、避けては通れない課題でありつづけるだろう。その意味で、この国の応用哲学には、「3・11」の見えない刻印が押された

とも言える。この刻印を胸に刻み、右に挙げた難題を真剣に引き受けようとしている、日本の、そして世界の人たちに、課題に立ち向かう勇気を届ける。応用哲学会が、そのような役割を果たして欲しいと念ずるし、そうしなければならぬと切に思う。

* * *

中国語論文、韓国語論文の翻訳は、それぞれ、京都大学大学院生の鍾宜錚氏ジョウイソウと方俊植氏ハヤシテツシにお願いした。お二人とも、ご苦労さまでした。また、姉妹編の『学ぶ人のために』を担当して頂いた大隅直人さんには、今回も何から何までお世話になった。ご本人が立ち上げられたばかりの大隅書店から、本書を出版して頂くのは、僕にとっての喜びでもある。大隅書店に幸あれかし！

どの本にも、それに関わった人の想いが宿っている。なので、書物を手にすることで、その人たちの体温を、感じようと思えば、感じる事ができる。中でも、本書には、少々、発熱気味と言いたくなるような熱が籠っているはずだ。それは、応用哲学という新しいムーブメントが放つ「若氣」であり、その旗の下に集う人たちのぶつかり合いから生ずる「摩擦熱」でもあるだろう。読者の皆さん、特に若い方々に、その熱気を肌で感じ取ってもらえれば、編者の一人として僕は本望である。

二〇一二年三月一日 東日本大震災から一年になる日に

出口康夫

はじめに 2

I 宣言する!

—— 応用哲学とは何か

13

出口康夫

応用哲学宣言

14

戸田山和久

哲学を応用するとはいかなることか

28

美濃 正

現実の問題を解く哲学 —— それに応用哲学だ!

37

伊勢田哲治

異文化コミュニケーションとしての応用哲学

46

河野哲也

応用哲学は勝利すべきである

55

II 提案する!

—— 応用哲学への期待

63

茂木健一郎

哲学 —— 切り開くために

64

服部裕幸

応用哲学への思い —— 応用哲学会はいかにして発足したか

78

横山輝雄

応用哲学と日本語

87

藤井 聡

「応用哲学、改め、哲学」ではどうでしょう?.

97

III 実践する!

—— 応用哲学の挑戦

105

森岡正博

私が応用哲学だ! —— その理論と実践の素描

106

中山康雄

現場から出発する哲学

114

斉藤了文

技術論をつくろう —— 時間と人工物

122

柴田正良
信原幸弘
眞嶋俊造
水谷雅彦

自由な行為者としてのロボット
不死は本当に望ましいのか
理論と実践の架橋
無知と寛容と信頼と

135
144
152
160

IV 横断する！

—— テツガクとフンガクと

169

若島 正

ナボコフと哲学、そして読者

170

三浦俊彦

ヒューマニズムによる文学の哲学化

179

清塚邦彦

芸術作品とはどのような対象なのか？

187

谷崎由依

告白する文字列と(名前)になること

197

V 交流する！

—— 応哲(オウテツ)、東アジアへ

211

陳思廷・鄭凱元

南島の沈思 —— 台湾現代哲学史と「東アジア分析実作哲学」

212

李尚郁

規範性と専門性 —— 韓国の科学技術と応用哲学

224

VI 座談会

—— ポスト 3・11の応用哲学

233

戸田山和久／出口康夫／鷺田清一／野家啓一
中岡成文／小林傳司／比屋根均

論者一覧
310 305

Sample

おわりに

えー、どうも、テツガクというものは、どうにも不思議なところがあるわけで。と言いますのは、のべつまくなし、日がな一日、テツガクっちゃ何だ、何であるべきか、これがテツガクだ、いやそんなのテツガクじゃねえ、とピーチクパーチクやってるんでございますからね。こんなの他にあるかってえと、どうにも見あたらない。たとえば天文学とは何ぞや、って訊ねますと、そりゃおめえ何だ、空のお天道様とか星とかよ、近頃じゃ宇宙ぜんたいがどんな塩梅になってるか、どうやって宇宙ができたんだらうねえ、ってなことを調べるガクモンじゃねえのか。と、こう答えることができるわけでした、訊いた方も、ああそういうことをやってやがんのか、と納得す

ることになっております。

ところがでございますね。こと話がテツガクになると、そうは問屋が卸さない。テツガクってえのはかくかくしかじかだ、と答えても、訊いた野郎は、おめえの言う「テツガク」なんざホントのテツガクであるわけがねえ、いいか、ホントのテツガクってのはな、知性の病にことん苦しむことよ、…なんてんで。いかようにも口答えできちまって、いつまでたっても話はまとまらない、とこういうことになる。こりゃどうもしょうがないですな。てめえを疑って解体することが習性になっているガクモン。格好つけて言いますと、アイデンティティの不在／ゆらぎを自らのアイデンティティとするガクモン、；ワタクシもテツガク科出ですから、このくらしいの気の利いた言葉を使うんでございます。えーもう、テツガクってえのは、もうどうにもこうにも、ややこしいもんですな。

またこのお、テツガクとはそもそも何ぞやと論じたがるのは、テツガク者にかぎらないん。世間のひとつてえもんは、なぜだかわかりませんが、無闇矢鱈にテツガク好きでございませぬからね。「おう、近頃見かけねえが、なにか手習いにでも通ってんのか」「それよ。かるちゃーせんたーでちよいとテツガクの稽古をつけてもらってんのよ」「そりゃ乙なもんをはじめたなあ。てめえ意外に学がありやがるな」なんてね。ところが、世間のひとつが「こいつこそテツガクに違いねえ」と思っているもんは、当のテツガク者がやっていることと、妙な塩梅にずれていることがまああるわけです。するってえと、「お前さんテツガク者だつてねえ、お前さんの十八番のテツガクをひとつ頼まあ。何でもいいんだよ」とお座敷がかかったりしますな。合点承知の助、と芸を披露しても、どうもウケない。お前さんのテツガクはどうも深みがなくていけね

え。テツガクつてえのは生きる意味を教えてください。もんじゃあねえのかい、なんてかえって説経されちゃったりする。こんな目にあつた日にゃあ、どうにも具合が悪い。

さあて、こうなつてくると、テツガク者のやれることは三つしかありやしません。一つ目は、世間の目にてめえの方をどうにかして合わせちゃう。世間様がテツガクにお望みだったのは、何と言つても、箔つけだつたように見えます。やっぱ帝大にはテツガク科の一つもないとおさまりがつかねえから置いとくか、みたいなもんでございます。床の間の掛け軸と言いましようか神棚と言いましようか。「旦那、旦那のいま仰つた理屈ね、じつはプラトンやなんかまで遡れるんですぜ。どっか違うと思つてたけどやっぱ旦那の教養は大したもんだねえ、イヨッ、教養の吹きこぼれだね」「ホントかい。お前さんうれしいことを言ってくれるねえ。いや、お

世辞とわかつていても気分がよい。これで鰻井でもそういつてくんなん。なんてんで。これで世の中渡つていけるもんなら、そりゃありがたい。いまと違つてワタクシが前座の頃まではこんな具合でもやつていけたんでございませぬ、ええ。いまから考えると恐ろしい話ですけれど、だけど、これは過ぎた話。昨今では、テツガクへの信心もずいぶんと薄れてしまひまして、帝大でも「どうしましよ。この神棚。古びちゃつてるし、役に立たないからうつちやつちやいましよるか」「うーん。よしにしてこう。祟りがあるといけねえ」つてんでかろうじて続いているというていたらくですから。まったくトンデモねえ話。

てなわけで二つ目。こいつあ、世間におもねるのと逆の方角にいこうつてんで。つまるところ、素人衆はホントのテツガクなんざわかりやしねえ、テツガクは教養やら人生の意味やらそんなもんじゃなくて、ながーい修

行を積んでようやく、何やろうつてんだかが微かにわかってくるという、こりゃもう本当の玄人芸だ、つてんですね。「プロの技」つてんですか。当世風に言うると、ですからこのお、「スーパードヴィーニエンス」でも何でも。そういうケツタイな符牒をそれこそ山ほど覚えて、その上、様相論理なんていう四角とダイヤの化け物でも何でも自在に使えるようになって、ようやく問題のとば口に立てるって段取りなんです。しかも、そうまで骨な修行に耐えに耐えて、ようやくと考えようつてのが、ドーナツが回っているときに穴も回つてんのか、だつたりなんかして。こりゃ、どう考えても玄人の楽しみつてもんですな。「こんなのがこつちで言うテツガクの問題なんだからよ、何のために生きてるのかしらなんて問拔けな問いがテツガク的だなんて、勘違いも甚だしいつてんだ。そんな見違いをしているしみつたれな野郎は、テツガクに縁はねえの

よ。帰って味噌汁で顔を洗って出直してこいってんだ」。ほこりをかぶった神棚扱いが腹に据えかねていたテツガク者の中には、こんな喉呵を切る連中が現れたんでございますね。他ならぬワタクシがそうだったんですけれど。ワタクシが前座修行を終えまして、どうにかこうにかテツガクでお給金をいただけるようになったころのお話でした。

むろん、テツガクのプロ化はこれっぽっちも悪いことじゃございません。何しろそれまでは、昔の偉いヒトの書き物を読んで、「あのね、ボクちゃんここまで分かりました」と感想文を書いてりゃテツガクしていることになってたわけですから。結構なご身分ですな。でもこれじゃあ、箔がはげたら思いっきりバカにされても仕方ありません。とは言うものの、何でもこう、過ぎたるは及ばざるがごとしと申しまして。こうやってあんまりテツガクの回りに垣根を巡らしちまうってえと、

こんどはテツガクが世の中からいやに浮いちゃまって、せつかくのプロが無用の長物になっちゃまう。

そこで三つ目。一つ目と二つ目のやり方は、正反対に見えてホントのところはそうじゃないんでございますね。どっちも、はなっからテツガクってえものはこれこれこういうもんだというのを決めてかかろうとしますずしよ。だから、延々とテツガクとは何ぞやと論じるという、ややこしい羽目になるってわけです。三つ目のやり方は、そんなことはしません。まず、いきなり世間に出ちまう。そこで素人衆といっしょに出たとこ勝負であれやこれや考える。そのうち、テツガクってえのはそもそも何だったのがおぼろげに見えるてくる、とこういう寸法。この三つ目のやり方が何だてえと、こいつがワタクシの考える「応用テツガク」でございます。

というこつてすから、ホントのことを言う

と「応用テツガクとは何ぞや」を先に論じておこうなんてのは、愚の骨頂かもしれねえと自分ながら思ってます。何が応用テツガクかは、はじめに議論して決めておくようなことじゃねえんですから。この本でも、みんな、てめえのやってきたことを振り返って、てんでバラバラなことを書いてましょ？ でも、ワタクシはこれでいいんじゃないのか、と思ってるんです。てえのは、テツガクって何なのかを探す試みが応用テツガクなんですか、ますから。

そんなわけです、ワタクシたちが（応用）テツガクとは何かを論じるのはこれきりにさせていただきますし、お客さん。いまや、問題は論じることではなく、生きることだ、ってことになりましょうか。これはワタ

クシが言ってるんじゃないんで。カミュという方の言葉ですけども。世の中のいろんなところにテツガク者が出ていって、素人衆といっしょに考える。そこで、「ところでよ、テツガクってえのはそもそもいったい何だい」と訊かれたなら、胸を張って、「てやんでえ、いま俺っちとおめえがやってるのがテツガクじゃねえか」と答える。てえのがワタクシが夢見る応用テツガクの明日でございます。

二〇一二年三月二四日

志ん生のCDを聞きながら

戸田山和久

▼出口康夫（でぐち・やすお）

図書館の地下倉庫に死蔵されている古くい文献。十八世紀ドイツの算術書。銅光地の片隅で埃を被っている郷土資料。そういつた、誰も読まない書物を読みその面白さを世に喧伝するのが生き甲斐だという、「いちびり」精神に満ちた哲学者、他人へ同じことをするのが大嫌い。ライバルは黒田硫黄と松本大洋。

▼戸田山和久（とだやま・かずひさ）

東京は錦糸町の場外馬券売り場の裏手、立ち飲み屋の隣、ビュウ映画館の向かい、幼児の情操教育にはこの上なく素晴らしい環境にて育つ。テツガクは山の手や湘南の坊っちゃん嬢ちゃんがやるもんだと思っていたのに、根が粗忽なもんだから、いつの間にかこの道にさまよい込んでた。というわけで、こにすまよいたテツガクを見ると、すぐに解体して脱神話化してついでに自然化しなくなっちゃうんで、え、文句あるか。

▼美濃正（みの・ただし）

学生時代はカント哲学を専攻し、「由緒正しい」カント学者になる予定であったが、本書の共同編者二名を含めて数々の

悪縁につきまわれ、とうとうこういう「ヤクザ」な哲学の世界に踏み込むことになってしまった。というのはもちろん冗談であるが、出身地の風土にふさわしい大阪のリアリズムを哲学の世界で実践したいと思っている。そして、応用哲学というコンセプトは、この種のリアリズムにびびったり適合しているとも思っている。

▼伊勢田哲治（いせだ・ていじ）

最近「伊勢田哲治なんて何の役にたたないんじゃないの」とか「むしろ有害なんじゃないの」とか理系の研究者の方から言われることが増えていまして。そういうときは「あなたたちの役に立てよう」と答えるのですが、学問は何のために存在するのか、なぜ公的サポートが行われるのか、倫理学の立場からも問い直す必要があるですね。というわけで科学哲学倫理学などを専門にしています。

▼河野哲也（かわの・てつや）

哲学とは問題解決の一種で、それもタイプな難問を解決するものだと思う。さらに言えば、それは、誰かからの「依頼」があつて初めて成立する仕事だと信じている。今日も東京池袋の事務所から依頼の電話が鳴る（ないしメールが来る）の

を、机の上に足を放り出して、半分居眠りしながら待つております。

▼茂木健一郎（もぎ・けんいちろう）

一九六二年東京都生まれ。グオリア（感覚の持つ質感をキーワードとして、脳と心の関係、心脳問題）についての研究を行っている。

▼服部裕幸（はっとり・ひろゆき）

趣味はスキーとリコーダー。と言つても、カッコ良く滑れる訳でもなければ、人に聴かせられるほどうまく演奏できる訳でもないのが悔しい。初めは経済学を勉強し（学生紛争のこと）社会思想史に興味をもち、やがて科学哲学に手を染め、論理学や数学基礎論の勉強を始め、そのうちに言語哲学や心の哲学にはまっていた。

▼横山輝雄（よこやま・てるお）

一九五二年生まれ。科学哲学・科学思想史、日本科学哲学会理事。進化論をめぐり科学と宗教の問題などに関心をもち、科学論に影響をうけている。責任編集書『ダーウィンと進化論の哲学』、共著書『変異するダーウィニズム』。現在、南山大学人文学部教授。最近の大学をめぐりの変化に気づいていけない時代遅れの人間

わたしの専門は土木についてのいろんな人文社会科学なんですが、土木というのは世のため人のために街や国、地域や村をつくって、守って、育んでいくものなんです。結局は、私の専門は「世のため人のためのあらゆる学問を考える」というものなわけで、結局それはもう哲学そのものですね。

▼藤井聡（ふじい・さとし）

一九五八年高知県生まれ。大学は理系に入學するも肌に合わせて、文系学部にも入學するもまたまた肌に合わせて、大学助手になるも肌に合わせて半年で飛び出し、研究所に就職するも肌に合わせて、現在の大学に移つてはじめて落着きを得ている。はやくミリオンセラーを書いて悠々自適の独立研究生活を送りたい。

▼森岡正博（もりおか・まさひろ）

一九五二年静岡県生まれ。言語哲学、科学哲学、分析形而上学が専門。京都大学理学部を卒業するが、進路に迷い、ドイツで哲学を学ぶ。はじめハイデガーなどを読むが、しだいに言語哲学、論理学などを勉強。博士の学位をとった後、ドイツ企業の研究所に勤め、一九九一年から大阪大学の哲学科員となる。

▼中山康雄（なかやま・やすお）

一九五二年静岡県生まれ。言語哲学、科学哲学、分析形而上学が専門。京都大学理学部を卒業するが、進路に迷い、ドイツで哲学を学ぶ。はじめハイデガーなどを読むが、しだいに言語哲学、論理学などを勉強。博士の学位をとった後、ドイツ企業の研究所に勤め、一九九一年から大阪大学の哲学科員となる。

▼斉藤了文（さいとう・のりふみ）

まだ何となく五〇代にとどまっているが、定年までには技術論を書き上げて、悠々自適といきたいものだ。現代の科学技術の理解は、古い技術の紹介や、科学革命の強調や批判の枠組みではなく、記述的、社会的な視点が必要だろう。（法人である）企業の技術力、行政法の規制、保険制度などがキーワードとなる。

▼柴田正良（しばた・まさよし）

高校時代に学生運動をやっていた友人が、去年死んだ。肺がんだ。ああ、やだよ。って何がいやかと云えば、そいつのように「ちっぽけな正義」にこだわる気力と体力が、最近めっきりなくなってきたことだ。「死んでも直らないハチ」だったはずなのに、情けない。縁側で酒でも呑もう。

▼信原幸弘（のぶはら・ゆきひろ）

三〇歳くらいの頃から、心の哲学ひと筋でやってきたが、四〇歳の半ばころには、心身問題やクオリアの問題にも自分なりに一区切り付いたと思つて、それ以降は、心の具体的な内容に關する問題、たとえば意志の弱さや自己制御、不死の退屈さなどの問題にも取り組んで、また、「三〇三本立て」と称して、脳神経哲学、脳神経論理、脳神経リテラシーにも挑んでいる。

▼眞嶋俊造（まじまし・ゆんぞう）

一九七五年、東京都生まれ。英パーミンガム大学博士課程修了（Ph.D.）。専門は戦争倫理学、軍事倫理学、正戦論、専門職倫理。二〇〇八年四月より北海道大学倫理院文学研究科応用倫理研究教育センター准教授。二〇一〇年四月より同センター長。著書に『民間人保護の倫理——戦争における道徳の探求』がある。

▼水谷雅彦（みずたに・まさひこ）

前任校に哲学（論理学）担当として着任したときはこれで倫理学を名乗らなくていいのだと安堵したのですが、今の職場に移ってから五年倫理学に苦んでいきます。くやしので、できるだけ多くの若者に同じ苦しみを味わわせるべく日々努力しています。マゾヒスティックな快楽に耽溺しているのではありませんか？という疑いも否定できないのですが、この苦しみと快楽を伝達することも責務であると自覚しつつあるオヤジです。

▼若島正（わかしま・ただし）

現実世界よりかはるかに魅力的な詰将棋というバズルの世界と、小説という虚構の世界に心奪われたまま今日に至る。ヴァーチャルリアリティなんていう言葉がやはりだすずと前から、その住人

だったわけで、ようやく時代がこちらに追いついてきたのかと錯覚してみると、多少は慰められなくもない。

▼三浦俊彦（みづら・としひこ）

人間原理。可能世界。健康食品。概念芸術。分析美学。環境音楽。言語遊戯。蚯蚓飼育。異種格闘。量子自殺。疑似実験。輪廻転生。盗撮映像。肉食昆虫。反核運動。烏龍茶缶。創作怪獣。物神崇拜。等々四字熟語に憑かれて幾年間。言葉のみならずその「指示対象」に憑かれきているのはもちろんです。

▼清塚邦彦（きよづか・くにひこ）

一九六六年生まれ。東北大学で哲学を学ぶ。フッサール『論理学研究』カント『純粹理性批判』と読み継いだ後、現代英語圏の言語哲学に辿りついた頃には大学院の正規の年限をすぎていた。最近では分析美学への関心を深めている。著書に『フイクシヨンの哲学』がある。

▼谷崎由依（たに・ぎき・ゆい）

小説家。美学の研究室を修了しながら、縁あって英語小説の翻訳を行う。一足の草鞋というのはいく、本来両立し得ないものを指すらしく、二つながら言葉に開く現在の、まっとうなそれには当たらない。思想系の学問に触れたことも、やはり驚

がっているはず。著書に『舞い落ちる村』がある。

▼陳思廷（チェン・ステイン）

脱アムチエア哲学をモットーに、第一線の科学者など、知の実践家と深く交わり地に足をつけた哲学を目指す。主として因果性の分析に力を注ぐ。経済学、顧客情報システム、機械工学、認知神経科学、司法医学。その興味の幅は広く深い。

▼鄭凱元（ジョン・カイエン）

より多様な方がより一層美しい。そう語るブルースリーのカンフー哲学の信奉者。規則の逆理や傾向性の形而上学を論じつつ、機械工学者と協同したかと思えば、教えずと哲学絵本を出版し、狂子の新解釈を試みる。一方で神経科学の最先端と戯れる。マルチで（テロな）哲学者。

▼李尚郁（イ・サンウク）

ソウル大学在学時、科学哲学に惹かれたが、まずは科学を自身で体験すべく物理の修士号を取った後、ロンドンスクールオブエコノミクスで物理学の哲学に関する博士論文を執筆。現在、漢陽大学の哲学科で、夢を抱いた学生たちと共に、科学的な想像力や進化的倫理学についての研究を楽しんでいる。

これが応用哲学だ!

2012年5月1日 第一刷発行

編者

戸田山和久・美濃 正・出口康夫

発行者

大隅直人

発行所

大隅書店

〒520-0806

滋賀県大津市打出浜2-1 コラボしが21 407号

電話 077-523-7773

振替 00930-9-272563

http://ohsumishoten.com/

組版・装幀

北尾 崇(鶯草デザイン事務所)

校 正

上念 薫・正岡加代子

編集補助

松原ゆう・中島ゆかり

印刷所

共同印刷工業

製本所

藤沢製本

協 力

佐藤八寿子(Café-Intellektuellen Kyoto)

©2012, Kazuhisa Todayama, Tadashi Mino, Yasuo Deguchi

Printed in Japan

ISBN 978-4-905328-03-2

▼鷺田清(「わした、きよかず」)

一つにまとまるののたにかく嫌な人間です。暮らしのなかでも、哲学の仕事においても、ずっと「足どころか数足の草鞋を履いてきました。それを世の人は天の邪鬼と言ったでしょう。大学の行政という草鞋だけは、ほんとは履きたくなかった。それも丸八年。これからはわがままに生きます。まわりの人はずっとわがままだったと言うにきまっています。

▼野家啓(「のえけいいち」)

一九四九年仙台市若林区生まれ。哲学者。

この一年、自宅勤務先ともども東日本大震災からの復旧・復興に追われ続けた。

ようやく十年近い大学行政の奴隷労働から解放され、四月より「文学部唯野教授」に戻る予定。といっても定年まで残すところあと二年、「夕陽無限好/只是近黄昏」(李商隱)といった心境である。著書『物語の哲学』『増補科学の解釈学』『パラダイムとは何か』など。

▼中岡成文(「なかおか・なりふみ」)

山口県岩国市出身。昔の人には錦帯橋、今の人には米軍岩国基地で知られている(？)街。中高は広島のカトリックの学校

に通い、アメリカ人の神父さんと接したので、その強みを生かして、郷里に帰ったら「米軍基地は必要か」をテーマとする哲学カフェを開こうかと考えている(笑)。

▼小林傳司(「こばやし・ただし」)

気がつくと隙間にいる。入るものであって創るものではない学会を創り、見るものであつて出るものではないテレビに出ては後悔している。でも誰もやっていないことをするのが好きらしい。最近この隙間が大事だという人が増えて困っている。師はいいいひさいちといがらしみきお。哲学者に怒られないように、科学技術社

会論研究者と名乗っておこう。

▼比屋根均(「ひやくん・ひとし」)

何かを知ると「それは何故?」と思う自分が、これ使って何しよう?と考える工学技術の世界に入つて三〇年弱報いられることの少なかつた「それは何故?」の成果を日向に出すべく、人生の大どんでん返し「技術哲学 技術者論理に挑み始めた冒険家。合言葉は「目指せ!工学部哲学科!」。



Dies ist ein WWF-Dokument und kann nicht ausgedruckt werden!

Das WWF-Format ist ein PDF, das man nicht ausdrucken kann. So einfach können unnötige Ausdrücke von Dokumenten vermieden, die Umwelt entlastet und Bäume gerettet werden. Mit Ihrer Hilfe. Bestimmen Sie selbst, was nicht ausgedruckt werden soll, und speichern Sie es im WWF-Format. saveaswwf.com

This is a WWF document and cannot be printed!

The WWF format is a PDF that cannot be printed. It's a simple way to avoid unnecessary printing. So here's your chance to save trees and help the environment. Decide for yourself which documents don't need printing – and save them as WWF. saveaswwf.com

Este documento es un WWF y no se puede imprimir.

Un archivo WWF es un PDF que no se puede imprimir. De esta sencilla manera, se evita la impresión innecesaria de documentos, lo que beneficia al medio ambiente. Salvar árboles está en tus manos. Decide por ti mismo qué documentos no precisan ser impresos y guárdalos en formato WWF. saveaswwf.com

Ceci est un document WWF qui ne peut pas être imprimé!

Le format WWF est un PDF non imprimable. L'idée est de prévenir très simplement le gâchis de papier afin de préserver l'environnement et de sauver des arbres. Grâce à votre aide. Définissez vous-même ce qui n'a pas besoin d'être imprimé et sauvegardez ces documents au format WWF. saveaswwf.com



SAVE AS WWF, SAVE A TREE